月刊

JMITU

ディスカ

新型コロナ対応版

11月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2020年発行

No,431

希望退職公募も締め切り
今後会社将来はどうなるのか？

希望退職の公募もセガでは３０日で、締め切り定員に満たない場合は、２次募集を行うかもしれません。定員に満たしていたとしても、今後は希望退職に応じた人達の業務を引き継ぎや大幅な組織変更が予想されます。

希望退職を行った後の職場というものは、今までの経験からもモチベーションが下がり、職場の活気がなくなってしまいます。

会社はその先について、構造改革を継続し筋肉質な事業構造へしていき、２０２２年３月期以降は、「遊技機の業績回復」「コンシューマ分野グローバル事業へ注力」「国内ＩＲへの参画」していくと発表しました。

構造改革の固定費１５０億円の削減内訳を見ても、希望退職による人件費がほとんどです。経営の失敗は、すべて労働者に影響がくるのが明らかです。

大崎本社への移転は本当にするべきだったのか？なぜＡＭ施設を譲渡しなければならなかったのだろうか？ＩＲに参画し進めていくべきなのか？いろいろな部分考えさせられます。コロナの第３波到来の影響で今後も厳しい状況が予想されます。これからの経営判断によっては、もっともっと厳しい状況になります。

「企業は人こそが財産」と話しているのだからこれ以上のリストラは絶対にあってはいけない社員を大事にして欲しいものです。

整理解雇の４要件

使用者が、不況や経営不振などの理由により、解雇せざるを得ない場合に人員削減のために行う解雇を整理解雇といいます。

1、人員削減の必要性

人員削減措置の実施が不況、経営不振などによる企業経営上の十分な必要性に基づいていること。

2、解雇回避の努力

配置転換、希望退職者の募集など他の手段によって解雇回避のために努力したこと。

3、人選の合理性

整理解雇の対象者を決める基準が客観的、合理的で、その運用も公正であること。

4、解雇手続きの妥当性

解雇の対象者および労働組合または労働者の過半数を代表する者と十分に協議し、整理解雇について納得を得るための努力を尽くしていること。

使用者からの申し出による一方的な労働契約の終了を解雇といいますが、解雇は、使用者がいつでも自由に行えるというものではなく、解雇が客観的に合理的な理由を欠き、社会通念上相当と認められない場合は、労働者をやめさせることはできません（労働契約法第１６条）。

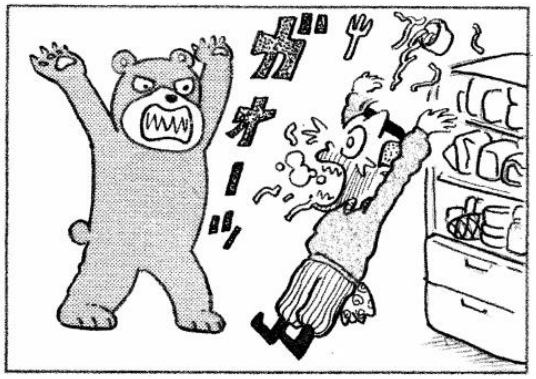
解雇するには、社会の常識に照らして納得できる理由が必要です。

4こま漫画

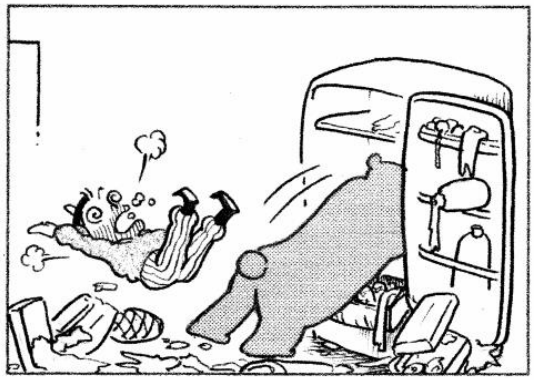
川﨑よしき

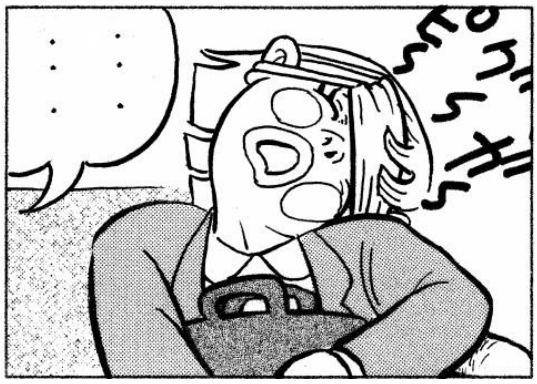
よっぽど仕事で疲れているのね

カクッ
ズリズリ
あれじゃコロナ対策よりも


ガオー!!

働かされ対策をした方がいいんだが





嘘をつくなお前が食い荒らしたんだろ!

掌編小説

もぎ取られた腕

仙洞田一彦

工場長が事務所に入って来た。入口にある受付カウンターの上に、新聞紙で包まれた物を置いて、そこから私に声を掛けた。

「ちょっと出かけてくるから。カンちゃんの腕だ。見ていてよ。そんなに時間はかからん」

「はい」

私は自分の席に腰掛けたまま、入口の方に顔を向けて返事をした。工場長は踵を返すと、すぐに出て行ってしまった。工場長は半袖のワイシャツにネクタイをきちんと締めていた。五十代半ばで、会社では社長、専務の次に位置する。席は事務所の一番奥にある。初対面の時、ちょっと驚いた。丸顔、長い顔とかはあるが、工場長の顔は四角い顔が踏みつぶされたようにひしゃげていた。でも目尻が下がっていて、時折、愛嬌があるようにも見えた。

私は今春高校を卒業し、就職したばかりだ。秋には東京オリンピックが予定されていて、ここが東京でもないのに何となくお祭り気分があった。私は当直で、一人事務所に残っていた。事務所には三十人近くいたが、女性を除く男ばかりが一人ずつ交代で当直をしていた。当直といっても九時までで、泊まりは守衛がやる。平日は工場が昼夜二交代だった。事務所前は大型トラックが入れるくらい空いていて、向こう側の工場は明かりがついていた。だから、まったく一人という感じではなかった。新入社員一人でもやらせるくらいだから、ただ事務所に残っていればいいだけのようなものである。

事務所は三十ばかりの事務机が、係りごとにまとめて置かれていた。社長と専務は、事務所の一部が仕切られている部屋に席がある。私は総務課に所属し、労災の事務手続きの仕事もしていた。入口の受付カウンターから比較的遠い、十数歩のところにある席に座っていた。

置いて行った包み物の中身は、工場長の言葉ですぐに分かった。もぎ取られた肘から先の腕である。でも、正確にはどこからどこまでかは見ていない。かさばりようからすると、新聞紙で何重かに包まれているはずだった。

事故が起きたのは三時休みが終わり、作業が始まってまもなくのことらしい。

会社は家畜のえさを作っていた。トウモロコシや高粱などの原料を決められた割合に配合する。それを二十キログラムずつ紙袋に詰める。紙袋の口がミシンで閉じられて、倉庫までベルトコンベアーで運ばれる。倉庫ではベルトコンベアーで流れてきた紙袋を、山に積み上げていくのだ。その作業は五人位でやっていた。

事故はその末端で起きた。流れてきた製品の袋を取り上げたとき、手がベルトコンベアーに巻き込まれたという。

ベルトの幅はせいぜい六十センチくらいでゴム製。鉄製のローラーの上を回転している。道路工事で、掘った土を運び出すのに使っているベルトコンベアーと、長さも形も

ほぼ同じである。端にはベルトを回転させるためのモーターがついている。
　流れて来た紙袋が滑らないように受けとるため、みんなゴム引きの手袋をしている。ベルトのゴムと、ゴム引きの手袋が密着して、持って行かれたようだ。
　ベルトに載せられた袋を見ているとゆっくり動いているように見える。引き込まれたかなと思ったらすぐ手が抜けそうな感じの動きだが、そうではないのだ。二十キログラムの紙袋がいくつも載っていて、モーターの回転で送っているのだから、かなりの力もある。回転を止めようとしても、人の力など苦もなく負かしてしまうのかもしれない。
　事務で入社したが、研修ということで現場に入った。倉庫の作業も一週間やった。私のように身体が小さくても二十キログラムの紙袋など、それほどでもなかった。ところが、午後、そして夕方になると六人が交代で受けているのに、もういい加減にしてくれと思うようになる。ベルトコンベアーの上を途切れずに流れてくるのを見ると体力よりも精神的に参ってくる。淡々と作業している先輩たちを見ると、体力より精神力の感じがしてくる。仕事のことを考えないで無我の境地でいるか、全く別な考え事をしているかしないと、とても持たない。
　左腕をむしり取られたカンちゃんは、片手を失ったまま、製品の山、現場ではハイと呼んでいたが、そのハイから駆け降りて来たという。救急車はもちろん、警察官も駆けつけて来た。
　ハイというのがどんな字を書くのか知らないが、先輩は積み上げた製品の山をハイと呼んでいた。家畜の餌だって牛、豚、鶏、また、その成長や用途によっていくつも種類がある。出荷しやすいように、崩れないように、現場の責任者が置き場所や積み方の指示をする。倉庫の中は高いハイもあれば、低くなっているハイもある。
　手を失ったカンちゃんは背も高くがっしりした体格の人だ。年齢は五十前後か、私の父親世代の人だった。倉庫の床はコンクリートだから、事故の瞬間、ハイの上から転落したら亡くなっていたかも知れない。とっさのことだが、階段を降りるようにハイの山を降りて来たに違いない。命には別条ないらしいのが、せめてもの幸いだった。
　夏なので事務所のガラス窓は、全部開けてある。私は包み紙の中を見ていない。誰もいないので、包みを開けてみることもできる。無造作に新聞紙にくるんであるだけだ。いつもなら、解放される九時になるまで、ぼさっと腰掛けているだけだった。小売りをしているわけでもないし、問い合わせの電話もまずない。また、電話が来ても答えられるわけもない。
　どこに出かけて行ったのか、工場長は一時間しても帰って来ない。労災事故の後始末で出掛けたに違いない。だんだんカウンターの上の包みが気になり始めた。近所にいる犬でも入ってきたら大変だと思ったりした。数時間前は体の

一部であり、生きていたのだ。それが、持ち主と離れてここにある。カンちゃんは手術の後のベッドの上だろうが、カンちゃんが左手で何かを持ち上げようと思ったら、このカウンターの上の腕が動くかもしれない。そんなことを考え始めると、恐ろしくなった。飼料を扱っているせいだと思うが、構内でびっくりするほど太った鼠をときどき見かける。その鼠が来たらどうしよう。カウンターの上を見まいとしても、視線がそちらに行ってしまう。腕だけ離れてあるということが信じられない。人間の手がむしり取られると、どうなるのだろう。見ていたらそれ以外の形では思い浮かばないのかもしれないが、見ていないので、筋や骨がむき出しになっているのかなと思ったり、それには血がついていたりなどと想像し、余計に恐ろしくなる。手は握られているんだろうか、それとも開いているんだろうか。

カンちゃんへの思いやりもどこかへ飛んでしまい、いやな日に当直になってしまったものだなどと考える。

事務所のガラス戸が開いて工場長が戻って来た。工場長は半袖のワイシャツにネクタイ姿だが、そのネクタイはかなり緩ませてあった。

「ご苦労さん」

「はい」

工場長はカウンターの包みには触れずに、まっすぐ事務所の一番奥にある自分の席に向かった。私の席の近くだ。

工場長は自分の席の後ろにある洋服掛けから、背広を取って手にした。

「顔色が悪いね。蛍光灯のせいか」

工場長は私の方を見て言った。

「なんとなく気味が悪くって。苦手なんです、ああいうの。臆病なんです」

私はカウンターの方を指して、人の怪我で、こんなことを言っていいのかどうか分からないままに正直に言った。

「あ、ああ」

工場長は私の顔を見て笑いかけた。すぐにその笑いを抑えた。そして口ごもるように、半開きの口で言った。

「そうだね。そういうのは慣れるものじゃないね。慣れない方がいい。怖いままがいい」

続けて、後の方は半ばつぶやくように言った。

「じゃ、よろしくね」

工場長はあらためて私の方を見て言うと、出口に向かった。カウンターの包みを、背広を手にしている反対側の手で、自分の体に寄せると小脇に抱えて事務所を出て行った。何もなくなったカウンターの上に目を向けたとき、工場長が無残な戦場体験を、口ごもるように話したことがあったのを思い出した。

左手は火葬し、いずれ自分が入る墓に埋葬したと後日聞いた。

「あの世に行けば、また両手だ」

そう言って、カンちゃんは笑っていたという。